

# 生き延びる力～戦中・戦後の体験談を聞く（前編）

岡本 和久

8月15日は終戦記念日です。1945年8月15日、玉音放送によって戦争が終わりました。戦中、戦後の体験をされた方々もだんだん減ってきています。しかし、極限状態を体験された人々の強いこと。多少のことでは動じない「生き延びる力」を感じます。平和が長く続き、安楽な生活に多くの人が慣れ親しんでいます。それはとてもありがたいことです。しかし、また、何か大切なものをわれわれは失いつつあるのかもしれない。その意味で、今、戦争体験を文章の形にして皆さまにお伝えすることは意味があるのではないかと思います、今月と来月にわたってこの企画をお届けする次第です。

2011年3月11日の震災はわれわれの魂を揺り動かす出来事です。多くの方々が筆舌につくせぬ苦しみと悲しみを抱えられました。しかし、若くして戦災を体験された人たちが強烈な生き延びる力を得られたのと同様、これから多くの「強い」若者がたくさん出てくることだろうと思います。そんな確信を持ちながらこの記事を書かせていただきました（なお、取材記事は私が取材録音したものをできるだけ忠実に文章にしたものです）。

## 壮絶な引揚げ、極貧の戦後を生き延びてつかんだもの

上田卓さん、上田早苗さん

上田卓さんは読売広告で取締役を務められた後、現在、ティー・エム・ジェイの専務取締役としてマーケティング・プロデューサーをされています。上田卓さんの妹の上田早苗さんはイギリス、スイス、アメリカ、香港、タイなどで日本語教師として海外勤務を経験、現在は日本語教育アドバイザーとして活躍、同時にフリースクール「上田学園」を主宰されています。

### ◆上田卓さん

私は1937年に、今は中国ですが満州で生まれました。父は満鉄（南満州鉄道）の技術畑の人間でした。母も同じく満鉄の研究畑の人でそこで二人が知りあって結婚、そして私が生まれました。葫蘆島（コロトウ）というところに住んでいました。その後、大連に長くいましたが、とても幸せな生活を送っていました。中国人の女中さんや畑を手入れしてくれる人などもいました。

父親は満鉄にいたということもあり、ある程度、戦局の実情も聞いていたようです。たまたま、1944年（終戦の1年前）大連港の埠頭に焼夷弾がひとつだけ落ちたのです。それがどうもアメリカ軍のものようだというので騒ぎになりました。父は、これはいよいよ米軍が満州にも来るだろうということでわれわれ家族を疎開させたのです。ハルピンの先に綏化（スイカ）というところがあります。そこから先はソ連領です。日本はソ連とは不可侵条約を結んでいましたから、北の方へ避難すれば大丈夫だろうと考えたのです。父は大連に残り、われわれ母親と私と弟3人とメイドさんなどを連れて移動をし、綏化の日本人町に落ち着きました。綏化での生活も幸せでした。ある意味、戦後、日本に駐留していた米国人のような生活だったのです。今から考えれば天国でしたね。そこで終戦となったのです。



終戦の当日、私は夏休みで家にいましたが、あの気丈な母がワーと泣きだしたのです。ラジオが鳴っているのですが、私は意味がわからない。なぜ、母親が泣いているのだらうと思い、私はオロオロするばかりでした。「お母さん、なぜ泣いているの？」と聞いてもわからない。夕方、まだ、明るいうちでしたが、母が私に「弟たちを集めて」というのです。母の部屋で車座に正座しました。そこで母は「実は、日本は負けたのよ。天皇陛下さまがそういうお話をされて、もう、日本はなくなるのよ。私たちももう生きてはいけない。それで、今日、ここでみんな一緒に天国へ行きましょう」というのです。母は何か青酸カリのようなものを持っていたようです。それを水に溶いて渡されました。「これを飲むと天国に行けるのよ」と母が言うのです。そして、本当に飲む寸前までいきました。でも、そのときどういうわけか私がそれを止めたのです。どうして止めたかかという、「お母さん、お父さん、帰ってくるんじゃないの？ 僕たちだけが天国に行ったら、お父さんかわいそうだよ。お父さんが帰るまで待とうよ」と言ったのです。それで母親も正気に戻ったのだと思います。とにかく、それではお父さんを待とうということになったのです。それで生き残ったのですが、それからが実は大変でした。

ソ連兵が拳銃を持ってどんどん入ってきて略奪、暴行を行います。ソ連兵の多くは罪を犯してシベリアに送られた人たちです。兵隊といっても「弾よけ」ですよ。彼らがどんどん入ってくる。中国は軍隊を持っていなかったので一蹴されてしまった。あるとき、若い娘さんがうちに逃げ込んできた。そのあとをソ連兵がわめきながらどやどやと入ってきた。その娘さんを犯そうとしていたんですね。母はすぐにわれわれ子どもたちに「お便所に隠れなさい」と言いつけました。そのあと、外では大騒ぎがあってソ連兵が出ていった。母がわれわれを出してくれましたが、その娘さんはワンワン泣いている。そのようなことがあちこちでたくさんあり、その当時のことでもあり、自殺をした娘さんもたくさんいたと聞いていた、と聞いていました。



その後もなかなか父親が帰ってきません。理由は明確でした。当時、満鉄の課題は関東軍の日本兵をシベリアに送ることでした。そのための鉄道の操作は中国人だけではできなかったのです。そのために父親も手伝われていたんですね。綏化はシベリアに行く最後の給油地でした。電気でも動く電車ではない。蒸気機関車は水と石炭が必要です。ほとんどが貨物列車で屋根がありません。そのなかに日本兵が動物のように缶詰になっている。それをソ連兵が自動小銃を持って見張っている。逃げたらすぐに撃ち殺される。燃料を綏化で積んでいる間、ソ連兵は暇です。そこで人間を的にした射的をするんです。私も狙われました。母親には絶対に外に出てはいけなと言われていたけれど、こちらはまだ幼い子どもです。目を盗んで外に出る。友達と二人で外で話をしていた時に、たまたま、そこに中国人が通り、その中国人がひっくり返ったのです。見ると撃たれているのです。中国人がみんな集まってきて大騒ぎになりました。これは僕が初めて人が殺されるのを見た瞬間でした。それが私は8歳のときでした。

それから引き揚げになりました。兵隊はシベリアに連れて行かれたけれど、そのほかの人たちは日本に送り返すと決まっていたようです。父親も綏化によく来ることができました。逃げようとして殺された兵隊は数知れませんが、兵隊をシベリアに送り折り返してきた最後の貨物車に乗って、家族は大連に戻りました。大変な数の人たちが押し込まれていましたが、朝になるといなくなっている人もいました。おそらく汽車から落ちてしまったのでしょう。汽車が途中で止まってしまい、そのあと撫順(ブジュン)まで歩きました。そこに収容所のようなところがあり4カ月を過ごしました。そこで生活していたのですが、食べるものもありません。中国の人が食べ物をくれたのがありがたかったです。

撫順にいたときに弟が一人亡くなりました。栄養失調です。中国でも蒋介石と毛沢東の戦いが激化して、それに巻き込まれて撃たれて亡くなった方もたくさんいました。そして、その収容所の中で生まれたのが早苗です。母が穿いていたモンペのなかで生まれました。というのは、母親は妊娠していたのですが、お昼の食べ物を探すために動き回っているうちにモンペのなかで急に生まれたのです。周りの人が「あ、生まれる！ 奥さん、寝て、寝て」と叫んだと言います。

### ◆上田早苗さん

それが私です。

### ◆上田卓さん

この子は多分、生きながらえることはできないだろうとみんな思っていた。そんなとき、中国人が「子どもをくれないか」と聞いてきました。父親は「このままでは生きていけるかどうかわからない。子どもだけでも中国人にあげよう」と言ったのですが、母親は「どうせ死ぬならみんな一緒にのほうがいい」と言い、それは実現しませんでした。そこから葫蘆島に汽車で行くことができ、そこにアメリカ軍の貨物船が来ていたのです。その貨物船で数日かけて舞鶴に帰ってくることができました。船で食べたアメリカ軍のスープとパンがいかにおいしかったことか。生まれてからこんなにおいしいものは食べたことがないと思ったほどでした。ほとんどまともなものはずっと食べていませんでしたからね。

舞鶴から東京に引き上げ、麻布中学のすぐそばの倉庫が引揚者寮となっていたのでそこに落ち着きました。ローンテニスクラブが近くにあり、アメリカ人がテニスをしていました。テニスボールが場外に飛んで来るとそれを拾って食費を稼いだりしました。父は満鉄もなくなってしまって、仕事もない。それでガードマンのようなことをしていました。私のすぐ下の弟も栄養失調で亡くなりました。男の兄弟が四人いたうちの二人、一人が中国で、一人が日本で栄養失調で死んだのです。今でもよく覚えています。母親が「さんざん苦労して、せっかく日本にまで帰ってきて、もう大丈夫と思ったとたんに死んでしまった」と泣いていました。私はがむしやらになんでも食べるタイプでしたが、弟は好き嫌いがあり、母が「好き嫌いはだめよ。好き嫌いがあると、結局栄養を摂れなくなってダメになってしまう」とその後もずっと言っていました。棺もなかったのです。ミカン箱を改造してそれお棺にして荼毘にふしました。



### ◆上田早苗さん

麻布の引揚者寮で、朝起きたら天井に空が見えるのです。台風が来て屋根がすべて飛ばされてしまったこともありました。

### ◆上田卓さん

父がガードマンで、母はアルバイトをしていました。父は夜勤も多く、結局、私が長男だったので家事は私が見よう見まねでやっていました。弟たちと一緒にやっているうちに、だんだん知恵がついてできるようになってきました。当時、水泳の古橋広之進ががんばっていました。私も水泳をやっていたんです。かなり上手でみんなにほめられる。それが何か生きる力になっていました。そういう意味では何か前に向かって進んでいました。やはり、引き揚げまでの極限状態があったので、それと比べればずっといい。あの苦しみがバネになっていますね。今、若い人にも「ありがたい世の中でそう簡単に殺されるわけではない。どんな大変なことがあったって、そこがどん底でそこからよくなると思えばいいじゃないか」と話しています。人間の世界って面白いものです。みんな、一生懸命に必死で生きていました。

引揚者寮には小学校6年までいました。いろいろな所で引揚者寮ができていたので6年のときにそこを出て、三鷹の寮に移りました。それで少しずつ生活も安定してきた。

### ◆上田早苗さん

私は有栖川公園近くの幼稚園に行っていました。大使館が多いので外国人の子どもが多いんですね。外国人の子どもが泣いているのを見て、家に帰って「お母さん、キューピーちゃんが泣いてたよ」って報告をしたりしたものです。「何かね、四角いものがあったね、それを食べているんだよ」と報告する。いま思えばサンドイッチです。日曜日にはパンを買ってもらえました。兄たちは私のために一つだけコッペパンを買ってくれました。それを有栖川公園に座って食べました。それが本当においしかったです。学校の給食もとてもおいしかったです。今から考えればとても食べられない味でしたけど。周りがみんな貧しかったので。



よく覚えているのは、みんなでケーキを「見に行きました。食べるのではない、見に行くのです。ケーキ屋さんが近所にできました。そこにクリスマスのケーキが飾られていて、ケーキの家の横にお菓子のトナカイがありました。母がそれを見に連れて行ってくれました。「これはね、ケーキと言って食べられるのよ」って教えてくれました。「本当にこれが食べられるの？」と聞く私に「そうなのよ。クリスマスっていうキリスト教のお祭りがあって、そのときにこれを食べるのよ」と教えてくれ、それを見に行くのが楽しみでした。何度も行ったものです。

母は「貧しくてもいろいろなことを知るべきだ」と考えていました。それで、本当にボロボロのかつこうだったのですが、国会議事堂などいろいろな所に連れて行ってくれました。武蔵野市に引っ越すことを決めたのも教育を考えたからだと思います。もうひとつの引っ越し先の候補は品川でした。そのほうが仕事は多かったそうです。でも、三鷹駅前には母の大好きな国木田独歩本、『武蔵野』の碑もあるし、教育には三鷹のほうが良いということでこちらにしたそうです。

#### ◆上田卓さん

賃貸の引揚者寮でした。長屋のようなアパートでした。みんなが助け合っていました。当時の私の楽しみは映画でした。欧米の映画を、アルバイトをして得たおカネで観に行く。映画のなかは世界が違うんですね。ですから、映画を観ている間は、楽しい、おいしい世界がある。そこに2時間ぐらいいる。出てくると「ああ、よかった。次の映画を観るまでがんばろう」と思ったものです。世界の差を感じましたね。アメリカ人家庭の使用人をしている家の子どもが友人でした。その家に行くとアメリカ人からおいしいものをもらえる。それを食べさせてもらえることも楽しみの一つでした。時代の知恵というのでしょうか、極貧のなかでもお互いに助け合い楽しみを見つけました。



現代の日本を見て一番気になるのは「心」ということです。マスコミなどで餓死などのニュースが取り上げられています。でも、本当のことをいったら、少し考えれば生きられないことはない。仕事だって選ぶから。俺は捨てられたとか、俺はダメになったとか言っているけれど、それは多くの場合、心の問題です。少し、心のあり方を変えれば道が開けてくる。苦難は人を成長させます。どん底で「よーし！」という心が必要なのです。戦争がいいわけではないが苦難は必要です。苦難が人を強くする。苦難のない時代が長く続いたので、みんな弱くなってしまった。「なんでそんなことで、自分がダメだといって自殺しちゃうの」と思うことがとても多いです。大学卒業して3カ月ぐらいで、せっかくな就職した会社を気軽に辞めてしまうんですね。考えられないですよ。昔だったらビンタをしても残らせます。今、そんなことしたらすぐ新聞ダネになってしまう。鍛える側も厳しいことができない。鍛えられる側はすぐにいなくなってしまう。ですから、私から見ると今の社会って幸せそうに見えて意外に不幸だだと思います。

#### ◆上田早苗さん

今、「みんなぼっち」という言葉があるそうです。みんなというけれど一人。政府がいろいろと援助するけれども、人間の尊厳が大切にされていない。何か大切なものが骨抜きになっている。福祉という名のもとに一番大切なものが失われている。それが孤独感になっている。

#### ◆上田卓さん

最近は何かが足りなければすぐそれを与える。でも、「足りなければ作れ。それを応援するよ」というのが本当の姿です。政府もおカネさえ出せばいいと思っている。何か欲しいと小さい子は「ママー」と泣き叫ぶ。泣くのを止めさせるために欲しがるものを与える。そういう子どもたちが今、大人になっています。怖い話です。モノがありすぎるのも人間社会にとって問題ですね。若者に言いたいことは、人間も、すべての動物もエゴの存在だということです。みんな、自分がよくなりたいと思っている。ただ、自分が幸せになるためには人とつながりが大切です。人を大切にしなければ自分は幸せになれない。一時的でもいいから自分を少し引いて相手をたてる。そうすればその人は決してそれを忘れない。自分が困ったときに助けてくれる。弱肉強食の動物の世界でも、結局群れを作って助け合っている。「最大のエゴのためには人を助けよ」ということを一番言いたいですね。自分の取り分を減らしても人に譲る。それが自分のためになる。気がついたら自分が一番幸せになっているのです。

## 若いときの苦労は買ってでもしろ！

田中義博さん

新日本証券副社長、太陽投信(現新光投信)社長を経て現在、太陽インベストメント・アンド・コンサルティング代表取締役。ニューヨーク、ロンドンなどに駐在経験を持つ。

僕は昭和7年、1932年の生まれです。今年10月に80歳になります。父は、当時のブリジストンのいわゆるノンキャリアの職工長でした。夜間の工業専門学校しか出ていない技術者でした。同社は地下足袋から始まった会社でしたが、すでに自転車、自動車、戦闘機・爆撃機のタイヤ、靴(軍靴)などを作る会社で、いわば軍需産業だったのです。ある程度、戦争が始まることはわかっていたんでしょうね。同社は青島とジャカルタ、そして台北に製造拠点を作ることを決めたのです。父は台北の工場を作れという命を受けて技師四人で赴任しました。それが昭和12年です。私を含め家族は昭和14年に父と合流、小学校1年生でした。当時、台湾には日本人が60万人いました。完全な日本の植民地です。台湾府の総督は陸軍大将か、海軍大将。父は技術の親玉で、下に台湾人が5~600名いました。子どもを戦争に行かせたくないで富裕層の台湾人は息子を軍需工場に入れたいわけです。軍需工場で働いていれば軍隊に行かないでよかったのです。それで台湾人の金持ちがいろいろなツテを頼って息子を入れようとしていたのです。



私は台北一中という日本人学校に入学しました。約50人のクラスで、そのうち4~5人が台湾の富裕層の息子でした。中学は台北一中が原則、日本人だけ、二中が台湾人だけ、そして三中は日本人と台湾人と分けられていた。私の入った一中にはごく少数の台湾人がいたのですが、彼らはものすごく優秀でした。成績トップはいつも彼らでした。彼らは日本が追い出された後、みな立身出世をしています。

中学には入ってもほとんど勤労動員で勉強はしませんでした。1、2年生は勤労、3年生は軍隊に組み込まれていました。すでに、米軍は沖縄に上陸をしていました。次は台湾だという危機感が高まっていました。まあ、「たぶん敗けるのだろう」と思いつつ軍需工場などで働いていました。空襲も日常的で随分多くの人々が死んでいました。顔のない死体がゴロゴロしていました。わが家も沖縄から逃げてきた人のための避難所になっていました。総督府に1トン爆弾が落ちました。地下まで貫通して地中で爆発するのです。すべてが飛ばされてしまう。学校も半分は崩壊しました。

終戦を迎えたのは中学1年のとき、そのときは農業試験場に動員されていました。暑い日でした。天皇陛下の玉音放送があるとは聞かされていましたが、ザー、ザーという雑音ばかりで何も聞こえない。終わったら先生が「敗けた」と言ったのです。両親も軍需産業に勤めていて戦況がわかっていたので、それほどのショックはなかったように思えました。戦争が終わって1週間ぐらいで授業が再開しました。先生たちは立派でした。英語の授業も始まり、数学も物理も化学も日本語の国語も、そして中国語も開始されました。後年、仕事で中国に行ったとき「あなたの中国語の発音はいいね」とほめられたものです。そのころから台湾人同級生の報復が始まりました。クラスのガキ大将だった男は学校の帰りに待ち伏せされ、ひどい目にあわされました。幸い、僕はガキ大将の子分でしたから直接的に暴力を受けたことはありませんでした。台湾人学生連盟というのができて暴力で報復する。戦中はガキ大将が台湾人を殴っていた。それでも彼らはだまって我慢していた。まさに報復でした。授業が始まる前に学生連盟がダミーと教室に入ってきて黒板に大きく「犬」と書く。中国で犬というのは最大級の侮辱的な言葉です。「貴様たちは犬だ。このなかで台湾人の同級生をいじめた奴は立て」と言われる。しかし、誰も立たない。立ったらやられる。そうすると「やっぱり犬だな」とあざ笑いながらガキ大将を殴る。



終戦までは工場などでも台湾人の職工を殴るのは日常茶飯事でした。戦後、父のところにも報復が来ました。幸いに叔父が陸軍軍曹だったのです。父は彼の所属する分隊を工場で働かせるという便宜を図っていた。槍、刀などを持った中国人が報復に来たときに、すぐ私は叔父のところへ飛んでいった。「おじさん、来たー！」と叫んで飛び込むと叔父などは銃剣や刀を持って助けに来てくれた。わが家でも押入れのなかに日本刀を隠し持っていました。それは使わないですみました。倉庫なども武装強盗団に襲われたりしていました。守衛さんは頭を槍で突かれながらも守衛室まで走りサイレンを鳴らしました。サイレンを聞き、銃剣

道5段、剣道名誉7段だった父は防空頭巾をかぶってわが家の日本刀を持って駆け付けていました。トラックで台湾人部落にまで追い返す。そのようなことはたくさんありましたが、満州でロシア軍が攻めてきたというようなことはなかったですね。やはり、日本が台湾ではいい政治をしたということがあったのではないかと思います。あくまで個人的な怨恨を晴らすという感じでした。

私が病気で寝ていたときの事です。父は米軍の良い毛布を手に入れていました。その毛布で私が寝ていたのです。そこに中国人の警察官が靴のままわが家に入って来ました。大きな拳銃を突きつけながら「この毛布をよこせ」というのです。母は懸命に日本語で説明して泣いて頼んだ。結局、他のものを持って帰りました。そんな生活をしつつ昭和21年4月に帰国しました。国家を失った民族の悲哀をしみじみ感じましたね。

帰国して父の兄の家に居候となりました。親子7人が6畳一間と3畳、しかも、そこは養蚕のための部屋でした。父の兄は貧乏百姓だったのです。しかし、農地解放になり大地主の土地をもらえることになった。それである程度の自作農にはなっていました。幸い父はブリジストンに復帰できた。何階級か格下げになり、父は随分悔しがって泣いていました。当然、給料も下がる。とても安月給では7人家族を養うことはできない。当時としてはみんな生きるためにやっていたことかもしれませんが、闇の取引などにも手を貸していたようです。中学生の私も闇の品の運び屋まがいのことをさせられました。早朝に墓場で商品を渡すのですから、いくら子どもでもこれはよくないことなのだとわかりますよ。でも、生きるためにはそれも仕方なかったし、みんなそうやって生き延びるために何でもしていたのです。

戦争中に父は兄に3000円送金していました。帰国したら家を買おうと思っていたのです。昭和15~16年ごろですから3000円もあれば家を買えたのです。ところが叔父はそれを銀行に入れてしまった。そうしたら、預金封鎖です。一人500円しか預金を下ろせない。しかも、戦争に敗けて帰ってきたら3000円といっても米20~30キロぐらいしか買えない。大インフレが始まりつつあったのです。とにかく絶対に物がなかった。

半年ぐらいで叔父の家をでて、父の実家のあった博多から15キロぐらいのところの社宅に入れました。父は何としても田んぼを買わなければならないと思っていたようです。とにかく、6000円ぐらいで棚田を買ったのです。博多の町まで流れる大きな川の支流の上流にありました。良い米が取れるのです。その棚田を耕す仕事が私と弟にまわってきました。当時は化学肥料などありません。そこで叔父の家にある牛車を借りて、空の樽を満載にして、博多の町まで15キロ行って肥えを買って歩くのです。人糞の汲み取りですね。隔月に一升ぐらいのコメを渡して売ってもらっていた。お得意先が何十軒かあったのです。樽を人糞で満載にして、それからまた牛車で15キロ帰ってくる。とにかく、そうして苦勞して30万円ぐらいのカネを貯めたんですね。それでまた、別の家と田んぼを買ってという風にして増やしていったんです。



高校に進学するときに、叔父は私を線路工夫にしようと考えたようです。父は「自分は学校に行っていないからこの子は行かせる」ということで進学しました。大学に入試するときも九大に入れなかったら就職しろと言われていました。結局、九大に入学して、大学を昭和30年に卒業しました。学資は全部自分で調達しました。奨学金ももらい、アルバイトをして、衣類まですべて自分で稼いだカネで賄いました。父は会社を辞め、雑貨と野菜を売る店を始めました。少しずつ土地も値上りを始めました。さらに雑貨屋を処分して今度は西鉄の駅の前に土地を買い、書店を始めました。すぐそばに高校ができるという情報を得ていたのです。書店をやりつつ学校や役所に入出入りしているうちに市会議員になりました。次に書店も売却し、自宅のそばにビルを建てました。その意味では5人兄弟で本当に苦労したのは上二人、下はそれほど苦労はしませんでした。まあ、もちろん、今の若者とは比べものにならないでしょうけれどね。父は市議員を16年勤め、勲六等の勲章まで最後はもらいました。



必死の思いと覚悟でもって大日本帝国のために国民皆が力を合わせて頑張ってきたが、祖国は米国に破れました。当時、台湾にいた日本人は1945年8月15日をもって祖国を失ったのです。青天白日旗を振りながら天稗棒と銃と身の回り品を担いで行進していく支那兵を出迎えさせられたあの屈辱は忘れられません。強い祖国があつての国民の生命・財産の安全です。父は身の危険にもあいました。そして、すべての財産を失いました。

私は1972年に初めて米国ニューヨークに赴任しました。超大国アメリカの巨大な力に圧倒されましたが、逆に「俺は日本人」である、いくらアメリカに敗れたとはいえ、日本人としての魂まで失ってはならない。必ずや日本を復活させ、欧米列強に伍してその存在をあらしめる国にしたい。そのために力の及ぶ限り、自分の専門分野(投資銀行業務)で欧米の大金融機関に恥ずかしくない仕事をしたいと念じながら今日まで頑張ってきました。

若い人たちへのメッセージですか? 「若いとき、苦労は買ってでもしろ」ということです。そして、「その苦労に向かっていけ。苦労をすると新しい自分が見出せる」ということでしょうね。「若い人たちよ、今からでも遅くない。世界に飛び出して行って日本人の存在を示してもらいたい。そのためにはわが国の歴史・文化を改めて学び直し、かつ、相手国の民族・歴史・文化をしっかりと勉強してほしい」それを一番、言いたいですね。

## 空襲敢闘記

### 岡本 茂和

私(岡本和久)の父(岡本茂和、1917年生れ、2000年没)は「空襲敢闘記」という随筆を残しています。1945年5月24日の深夜にかけて一家の住んでいた東京都目黒区大岡山付近が空襲にあい、辺り一面が焼け野原となりました。そのなかで父をはじめ親戚や近所の人たちが必死に自分の生活を守っている様子が書かれています。国と国との戦争に翻弄される民衆、そのなかで必死に自分たちを守る人々、今から60数年前にあった事実を風化させないためにも皆さんに読んでいただきたいと思い、ここに掲載させていただきます。

昭和二十年五月二十四日午前零時半頃であつたか、確かな記憶はないが突如警戒警報を知らせるサイレンが鳴り響いた。早速、ラヂオのスイッチを入れると敵数機が帝都に近接しつつある旨放送している。考えて見れば前回以来一ヶ月余、昼間一度立川へ多数機で来襲したのみにて静寂に戻っていた帝都であつた。其間約一ヶ月、吾家に於いても大きく時を稼いでいた。その前夜、疎開先の祖母様から御手紙があり次の便で送らねばならぬ品物を話し合ったりしながら、今月から御米差し引きとなった丸パンを食べた。しかも丸パン一日分二個を一度に「うまい、うまい」と頬張り、残っている御飯でお茶づけを食べ、寝しなには更にその日小生が会社で配給された海宝麺を「ひじきと変わらぬ」等云いながらお皿一杯試食して、それこそ超満腹感を吃しながら九時前後床に就いたのであつた。

サイレンで起こされた時も又、敵大軍来襲の報道を聞いた時も、実に吾ながら平常と変わらず、寧ろより以上に落付いていることができたのは実は前夜の栄養食が腹に一杯ありそこから力もりもりと泉の如く湧き出していたからであった。当時、ラヂオは不絶情報を伝えていたが記憶にない。只刻々と迫る敵夜間大空襲の前ぶれを放送していた様だ。始めて隣組防火郡副部長の腕章をつけた。何だか急に力がついて来た様な気がした。みどり(妻)もすばやく自身の用意を整え持出す荷物を玄關に揃えていた。みどりと二人で順序よく完成したばかりの中壕にハシゴをつたって先ずトランク立てに信玄袋、それに其前日持ち帰った海宝麵の一包、座布団、蒲団包等押し込めて蓋をした。門の傍の壕にも木箱等入れて先ずはこれで一安心と云う処だ。

照空燈に照らされて敵機が一機、又一機、三四千の高度であちこちを飛び廻る。見る見るうちに南方の空がまず赤くなる。次いで北方の相当はなれた処にバラバラと焼夷弾が落ちて行くのが花火のように見える。と突然頭上を通った一機から落としたのであろう身をつんざく様な落下音と共に成功館付近より火の手が上がった。愈々身近に落ち出したかと思うと思わず身のしまる感がする。空からは焼夷弾の油片が赤く燃えながらあちこちに落ちる。前の畑にも一つ。早速とび口でたたき消す。桜の木にもひっかかって燃えている。皆盛んにガヤガヤ叫び声を立てて消火に懸命だ。これなら「延焼の心配なし」と思ってすぐ家の前に戻り上空を警戒する。盛んに火のついた油片が落ちて危険極まりない。特に家の垣根によくひっかかる。小さい油片なのでたたくればすぐ消える。があちこちなので漸く忙しさを増して来た。

折から家の真西より飛来してきた敵一機、頭上より約五十度位手前にてバラバラバラバラと火の粉が落下した。「これはいかん」と思うとたんにザーザーと云う物すごい落下音、思わず門前の街燈に身をよせた瞬間、パリパリ、ツドン、パリパリ、ツドンと云う屋根を貫く音。火の手は我家よりわずかに南へ三軒目の家の前当りから上がった。皆、消火を始めたのでこの分なら延焼は大丈夫と又しても危中の一安心を見つけた。がしかしそれから一、二分も経ったであろうか、又も同じ西方上空に一機来襲、同一個所で焼夷弾を落下した。今度は駄目かと思う一瞬、火の手は家の前の谷を横切って落下。一本の帯となって火を吹き上げた。始め風向は北風で成功館の方より火の粉の飛来するのが心配だったが後には西風になり谷向うから吹きつける。前の谷の溝より南は火の海だ。隣が焼ければ家が危ない。取るものも取り敢えず駆けつけて水をかける。隣には若い女の人がおり小生二人にて水をかける。たちどころに用水槽の水が無くなる。家のも無くなる。然し一軒先の家の火はいよいよ燃え盛る。風呂場の水に気がつき一生懸命に隣のはめ板に水をかける。体は水でぬれてぐしゃぐしゃ靴も目茶苦茶、ブカブカしてすぐぬげる。風呂場の水もたちまち使いつくした頃、火は残念ながら隣の二階に移り始めた。二階には水がとどかない。その上その水さえ遂に補給がつかぬ。「もう之までだ」、自分の家を守ろうと思って家に引き返した。

家の台所近くに来るや否や又々新しい焼夷弾が次、次へと落ちている。此時、一発は異様な音を立てて遂に吾家の台所天井を貫いたらしい。外より見ると台所中、硝子越しに真赤になっている。「畜生！遂に落ちたか」、今迄、今の今迄は大丈夫と置いていたが。体は隣家の消火で既に疲れ切っている。台所の木戸口に走り寄ったら運悪く中から閉って開かない。力にまかせて木戸をたたき破り中に入る。既に台所中、一面、火の海だ。中に入ったが水が無い。水道は勿論出ない。大声で叫んだが誰も居ない。どうにも手のつけ様がない。困った揚句、家の中に駆けて行った時、ふと足許の掛蒲団に気が付いた。「これだ、これだ」とすぐ大きな掛蒲団を一枚ひきずる様にかついで来て台所の戸棚の前の火点にかぶせて足でふみつけた。蒲団の四方から火がふき出る。丁度此時、近所で人が小生の声にかけつけ、一、二杯水を呉れた。蒲団の上からかけたが大した効果もない。そこへさらに近所の人が水をもって駆けつけてくれた。すぐかける。然し次の水までの間が長くて火は仲々劣えぬ。このとき天佑か神助か、蒲団で火力を押さえているそのすぐ下に土釜が二つあり、しかもその土釜に夫々水が一杯入っているではないか。「これだ、これだ」、すぐお釜二杯の水で蒲団をぬらし次の水を待つと不思議と急に火力は劣え始めた。「しめた、しめた」、もう大丈夫だ。そう思っている中、ご近所の人たちから夫々数杯の水補給あり遂に消し止めた。

「消したぞ」、大声で叫んで台所から出るや否や、今度は隣家の二階が炎々と燃えている。今度は「家に水をかけろ」と叫びながら一心不乱に水をかける。裏口よりみどり、隣に住む叔父一家、皆代り替りに庭より水を持って来て小生に呉れる。羽目板にどんどん注ぐが、すぐ湯気になって消えてしまう。吾家もついに燃えるかと思ひ荷物を運びだすことを考えたが、すでに壕にいろいろな物のみどりが入れてあったので安心。焼けても大丈夫と思いつつも、此の後、いよいよ最後に持出すべきものを頭の中で数え上げた。御位牌、ラヂオ、自転車…。しかし、家は燃えぬという信念の下に消火しているのだ、これらのものは最後まで持出さぬと決心、消火に専心する。もしここで持出せば皆の気持ちが乱れる事を恐れたからだ。こうしてどンドンどンドン水をかける。家の井戸、隣の井戸と両方から補給して呉れる。



周りでは「あと五分だ、頑張れ頑張れ」と連呼している。小生もそれに呼応して水をかける。既に炎はこちらになめかかって来る。顔が暑い。焼けつく様だ。思わずバケツの水を頭からかぶる。数分経つと又耐えられなくなる。又水をかぶる。全部で明け方まで何杯かぶった事だろう。バケツリレーの水もなかなか間に合わぬ。そこで杓子でドブ水をかける。全く夢中で水をかけていたら遂に最悪の場面に直面した。即ち炎上している隣の二階が家の上に押しかぶさって倒れかかって来たのである。愈々絶体絶命、思わず持っていた柄杓で支えた処が先の金の桶が取れてしまった。思わず素手にて支えはねかえた。そばで叔父様が「手では危ない、何かないか」とおっしゃって居られたがそんな暇はない。今考えてやけどをしなかったのが不思議な位だ。疲れた体に一心にお念仏を称えながら、神仏の加護を祈りつつ消火に縦横無尽、頑張ったのである。倒れ掛かったやけた柱も漸く火が衰え始めた。やや暫く、もう延焼の危険は去ったと思われたが未だ余燼が上がり炎は燃えている。今、心をゆるめ風向が変われば大変と疲れた体を自らはげましながら何回となくバケツの水を注ぎ込む。何時の間にか空はうす明るくなりかけて来た。時計を見たら四時過。一同、思わず顔を合わせお互いの敢闘を祝しながら先ず無事を喜び合った。小生もうれしかった。ご近所の人たちも来られ「四圍は全部焼けたが一軒丈残った、満願だ」と云って叫んでいる。皆敢闘したものの喜びの雄叫びだ。

この頃からどうしたものか寒さを感じる。一通りの寒さではない。悪寒だ。ガタガタふるえる。洋服も多少ぬれてはいるもののそんなに冷えている訳ではないのだが、皆に聞いて見ると皆が皆ふるえている。余り火の側で駆け回っていた反動であろう。焼け跡の火に遠くからあたりながら暖をとる。いつの間にか近所の火もすっかり下火になっている。見ると一面の焼け野原になっているので驚いた。まだ余煙と灰煙でよく見えぬがとにかく相当な被害らしい。一方、家の中は台所の焼夷弾消火の時、土足にて往来し、又、水をかけたので泥と水でぐちゃぐちゃ、畳の上にあがる訳にも行かぬ。然し焼け残ったのだ、この位はしかたないとあきらめる。腹が減ったので平常用意していた炒り米を食べる。みどりは御飯を炊く。焼け出された人の手前もあり余り仰々しくできぬのでこっそりとおにぎりを作る。小生もみどりと腹一杯、食べる。相当食い込んだ事と思いつつも、今、この時元気を出さねばと思いい遠慮無く頂戴した。お酒でもあれば大いに祝杯を上げる所だがそれどころではない。次の空襲にそなえて対策をねりつつ喜び合うのであった。

(次号に続く)

# 生き延びる力～戦中・戦後の体験談を聞く（後編）

岡本 和久

先月に続き、戦中・戦後の体験談を伺いました。痛感するのは、いかにわれわれがいる現在の環境が恵まれているかということです。このありがたい状況で、いかに「生き延びる力」を磨くのかというのは大きな課題です。せめて、あらゆることにチャレンジしていく気持ちを持ち続けることが大切だと思います。最後に島田知保さんと対談をさせていただきました。

## 鳥山百代さん

現在、83歳の鳥山さんは京城生れです。今はお孫さんたちに囲まれ、相変わらず活発に活動されています。しかし、まったく普通の「女の子」が体験した戦中と戦後は想像を絶するものでした。

## 初めて見る日本は緑がきれいだった

私は1928年(昭和3年)に京城、現在の京城(ソウル)で生まれて、今年で83歳になります。父は広島安芸吉田の農家の四男で、新天地を求めて韓国に行き、製麺業を始めました。当時、韓国は日本でしたからね。母は17歳で広島から京城へ行き、8歳年上の父と結婚したそうです。仕事が軌道に乗るまでは二人ともずいぶん必死に働いたようです。京城にあった三越にも麺を卸していたと聞いています。

私が終戦を迎えたのは17歳でしたが、それまでは実に満ち足りた生活を送っていました。百(もも)お嬢様と呼ばれて、使用人もたくさんいました。私が通った小学校は日本人だけで、明洞(ミョンドン)に近い南山という所にある学校でした。韓国の人たちともごく普通に付き合っていたと記憶しています。もちろん、日本人は支配する側でしたから、肉体労働などはせず、もっぱら韓国の人がするというようなことはありませんでした。

警戒警報や空襲警報が時々鳴ったり、偵察機などが来たりしましたが、実際に爆撃されることはありませんでした。しかし、灯火管制がありましたし、家には細菌戦に備えて防毒マスクなどもありました。

私は五年制の高等女学校に通っていましたが、昭和20年、繰り上げ卒業といって4年生の私も5年生と一緒に卒業させられました。玉音放送のあった8月15日は、進学した女子専門学校の夏休みでしたので家にいたのですが、ラジオの電波の状態が悪く、「以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」というところしか聞こえませんでした。でも、なんとなく「敗けたんじゃないかな」ということはわかりました。

役人や知識人の中には敗戦の前に荷物を日本に送り、ご自身も日本に帰っているという人もいたようです。でも、私たち一般人は報道を信じ、ある意味洗脳されていましたから、呆然とするばかりでした。そうしているうちに韓国の人たちが「マンセー、マンセー」と町で騒ぎだしました。勝利を祝っていたのでしょう。

姉と私は何をされるかわからないというので、家の中に囲われてしまいました。押入れに抜け穴を造ったりしました。流言飛語が飛び交い、みんな警戒していました。外へ出ないので社会の様子はあまりわからなかったのですが、デマもかなりあったと思います。ソ連や満州まではある程度の距離があったので、比較的秩序だったのではないかと思います。



姉が徴用逃れで海軍関係の職場に勤めていました。幸いなことにその関係もあって、引き揚げ列車の切符が意外に早く手に入りました。とにかく住んでいる所が日本ではなくなってしまうので、そこには居られないのです。仏壇とか、神棚、おひな様などを庭で燃やしましたが、人形(ひとがた)のものを燃やすというのは忘れられない記憶ですね。

一人が持って帰れる荷物は手で持てる範囲に限られていました。私は大きなリュックサックを持ちましたが、母は喘息の真ん中の弟をおぶっていたのでリュックを持つことができません。一番下の弟は小学校低学年なので大きな荷物は持てず、本当に大事な物だけを持って帰るだけでした。写真はアルバムから剥がして持ち帰りました。

当時、かなりのおカネを出せば、闇ルートで荷物を運んでくれる「闇船」というのがありました。両親はそれで荷物を送ったのですが、帰国後、ずっと首を長くして待っていましたがとうとう届きませんでした。

帰国するまではやかんと飯盒、お米を持って歩いていました。釜山で20日間ぐらい引揚船を待ちましたが、その間は本当に難民でしたね。満州から逃げてきた軍人さんたちがかなりいたのですが、その人たちは身ひとつで逃げているので荷物がありません。それで頼むと持ってくれたのです。それは本当に助かりました。もちろん食べ物物の差し入れなどはないですから、みんな、自分で食べ物を調達していました。まあ、おカネを出せば買えたということでしょうね。

母はかなり不利な闇ルートで日本円に交換をして、それを日本に持ち帰ろうとしました。おカネを持ち帰る方法については水筒の中に入れるとか、いろいろな話を聞きましたが、誰でも気づく方法はみんなバレてしまいます。船に乗る前に全員が身体検査をされるからです。女性の場合、韓国の女性が身体検査をしました。母は身体検査で見つからないようにするため、段ボールの波の部分の部分を切ってそこにお札を入れ、糊で貼り直してトランクのような形にして持っていました。



幸い見つからずに持ち帰れた何万円かのおカネは、帰国後非常に役立ちました。当時のおカネで家が十分に建つ金額ぐらいありました。まだ戦時中の昭和17～18年ごろでしょうか、5000円を日本に送金してそれで田畑を買っておいたぐらいですから、数万円というのは大変な金額だったのです。

帰国後、その田畑で採れたもので、十分ではないけれど家族8人が芋粥で糊口をしのぐぐらいのことはできました。帰国した年もちょうど9月に帰ったので、現物で小作米が入りましたから、それは助かりました。

興安丸という船で日本に帰ったのですが、船に乗ったときに船員さんが「お帰りなさい、もう大丈夫ですよ」と言ってくれたことが本当

にうれしかったです。安堵感、もう大丈夫だという思い、これは筆舌に尽くしがたいものでしたね。私たちは子どもでしたが、両親はもっとホッとしただろうと思います。一晩で玄界灘を越えて、山口県の仙崎の港に着きました。本当に緑がきれいだなと思ったのを覚えています。緑のなかに柿の実がなっていた。それが印象に残っています。

そして、驚いたのはすげがさに緋(かすり)の着物で日本人女性が肉体労働をしている姿を見たことでした。それまでは肉体労働をするのは韓国の人で、日本人が働くのを見たことがなかったのです。「日本人がこんなに働いている」ということが驚きだったというのは、今から考えると恐ろしいことでもありますね。それから、日本にはどんな山間部に行っても立派な小学校がある、韓国では当時、小学校は義務教育はなかったと思いますので、日本での教育の普及ぶりがよくわかりました。

仙崎から下関まで貨物列車で移動、山陽本線で広島まで来ました。印象深かったのは徳山の海軍工廠が全滅していたことでした。そして、被爆後の広島に到着しましたが、そこは焼け野原。何にもない。福屋というデパートの残骸が見えるだけでした。放射能が出ているかもしれないといううわさがあり、汽車に乗っているときは絶対に外に出てはだめだと言われました。

広島を少し先の祖母の家で一泊しました。そのときに着物を脱いで、五右衛門風呂で着物を煮沸したのを覚えています。シラミを除去したのです。シラミがいっぱい体についていたのです。そのときに裏の山で大きな次郎柿がなっていました。なぜかはわかりませんが、娘心に日本中どこにいても柿があるというのが印象的だったようです。韓国では街中に住んでいましたからね。

韓国では親戚がほとんどいませんでしたから、日本に帰ってきて、親戚の子とはすぐに仲良くなりました。祖母が「やっぱり血のつながったものなのう」と言ったのも記憶に残っています。



最終的には父母のふるさとの吉田に着きました。父の兄が大八車を引っ張って迎えに来てくれ、「これからは荷物を背負わないでいい」と言われたのがとてもうれしかったです。それで祖母の本家の一部屋でお世話になることになりました。四畳半一間、そこに8人が寝起きしていました。隠居所でしたがお勝手などちゃんと独立して生活ができるようになっていました。冬はあんなに足をつっ込んで、みんなが放射線状になって寝ていました。

父は京城にいるときから呆然状態でした。すべてを失ってしまったのですから無理ありません。でも、先ほどお話したように、米だけは買っておいだ田畑で収穫がありました。しかし、牛を持っていません。肩身が狭いというか、牛を借りたら、何日分の労働力で返さなければならぬのです。田植えは共同作業です。そのなかで牛を持っていないということではかにされる。だんだん、厄介者を抱え込んだということで祖母の立場が苦しくなる。気の毒だということで、姉は大津の東洋レーヨンに職を見つけて出ていきました。

私は広島女専への転校試験を受けて合格をしていました。しかし、親から「男の子が3人いるから、悪いけど女のあなたは進学をあきらめてくれ」と言われました。母は泣いて頼むのです。「それならどうして転校試験を受けさせたのだ」と思ったものです。一週間ぐらい泣きあかして、そして進学をあきらめました。

長男は学費のいらない師範学校に行き、卒業してから東京の江戸川区の学校の先生になりました。そのまま田舎にいても将来性がないですから、それを機に田畑を売ってみんなで東京に出てきました。それで家族全員で働き、下の弟は奨学金をもらって何とか家計が安定してきました。父母は子ども相手のお菓子屋を営みながら、つぼ焼き芋を売ったりして生活を支えていました。貧しいなかでも借金などはなく、質屋にもいかなかった。進学をあきらめた私は、健康保険組合で経理の仕事をしていました。みんな、とにかく必死に働きました。

今、私が一番感じるのは、教育の恐ろしさということです。私たちも言われるままに政府のいうことを信じていた。みんな、何の疑問もなく戦争の勝利を信じていた。良い面でも悪い面でも教育の力はすごいものがあります。総理大臣にはしっかりしてもらいたいですね(笑)。若い人には大所高所から世の中を見るような目を養ってほしい。そして、判断力のある人間になってほしいと思います。

私も娘たちを判断力のある人間になってもらいたいと思って育ててきました。私の子育ての基本でしたね。善悪、右にいか、左にいか、自分がどのような行動をしたらよいかというときに、判断する力を持ってもらいたいと思っていました。そのために学校にも行ってほしいし、経験も積んでほしい。私も子どもに的確なアドバイスができるような親になりたいといつも思っていました。成績がどうかということよりも、正しい判断ができるということの方がはるかに重要です。ひたすらそれを願っていました。

今の日本の教育は少し甘すぎるのではないのでしょうか。会津藩の「什(じゅう)の掟」に「ならぬことはならぬものです」という教えがありますが、駄目なものは駄目という教育が必要だと思います。若い人には「希望」を持ってほしい。私たちは何もなかったけれど無我夢中で働いてきた。そしていつもネガティブにならず、将来に夢を持って生きてきました。戦後のものすごいインフレのなかでも、とにかく希望を持ち続けてきた。おカネよりもモノの時代でした。だから今でもモノを捨てられない(笑)。給料がいくら上がっても追いつかない。おカネよりもお米のほうがありがたかった。そんな時代があったのです。でも、将来が明るかったですね。

今は豊かになりすぎたのかもしれませんが。一方で希望がなくなってきた。私が戦後、一番欲しかった物がミシンでした。それを得たときの喜びは忘れられません。今は満ち足りていてそのような喜びがなくなっているのかもしれませんがね。まあ、急に貧乏になれといっても難しいですけどね。

東日本大震災のとき、日本中の人たちが何とか自分も役に立ちたいと思ったでしょう。あの一瞬の気持ちを忘れないことです。モノは豊かになっても、心の豊かさはまだまだです。これからは心の豊かさに将来の明るさを求めていくべきだろうと思いますね。戦後、引揚者たちは一瞬にしてすべてを失いました。神戸の震災も、昨年の震災も多くの人があつという間に多くのものをなくしてしまいました。でも、何が起っても身につけた腕や知識はなくなりません。ですから、若い人にはしっかりそのような生き延びるための力をつけておいて欲しいですね。

## 宮崎一幸さん

経済ジャーナリスト、インテリジェンス・ユー代表

東洋経済新報社に長く勤められた宮崎さんに、今回は母上の手記を提供していただき、また貴重なお話も伺わせていただきました。

私の父は島原の農家の出身でした。当時は5男坊、6男坊には相続する畑もなく、結局満州に行ったのだと思います。満州といっても近いですからね。東京に行くよりも、もっと簡単に行けました。父は、満州の学校で土木工学を学んだようでした。母は親戚の関係で満州に行き、父とは満州での見合い結婚だったようです。

私は昭和16年(1941年)2月に哈爾濱(ハルピン)で生まれ、5歳まで暮らしました。父は黒竜江の大きな仕事にかかわり、その支部長になっていました。当時は家と役所が一緒のようなもので、土地も3000坪ぐらいありました。

7月になると、もう秋の訪れで庭中にコスモスが咲く。そこに馬車で冬のオンドル用の材木を一日中運び込んでいた。そこで姉と砂遊びをしていたことを覚えています。満州人の使用人やロシア人のコックさんまでいました。

もうひとつ覚えているのは、のべつ宴会をしていたこと。料理屋などそんなにはないですからね。うちには50人前ぐらいのお膳がありました。関東軍の人は宴会をするところがないので、うちに来ていたような感じでした。軍人さんは甘いものなどたくさん持っていた。ですから羊羹をくれたり、あめをくれたり、当時は珍しかったチョコレートももらったりしました。よく覚えていますよ。芸者さんもしょっちゅう家に来て、どんちゃん騒ぎをしていました。



宮崎一幸さんの母上、宮崎静江さんの手記より(以下、囲みはすべて)

北満の果て、国境の町、黒河(コッカ、現在・中国黒龍江省愛輝、アイホイ)。私達一家はこの静かな町に、二年余り住みついた。広大な黒竜江の対岸はロシアのブラゴエ(ブラゴベシチエンスク)で、時折小さな人影がみえる。ロシア牽制のためか黒河のネオンはいつも灯っている。七月末には一家揃って黒竜江の花火見物と酒落こんだ。昭和二十年八月十二日、冬物の整理もすんで、やれやれと一息ついて庭に目をやると東菊が咲き始めていた。掃除も念を入れて、明日あたり長崎のおばあちゃんを奉天まで見送りに行った夫も帰って来ると思い、部屋に東菊を活けておいた。「組長さん、集合してください。」との声に表に出る。

ロシアとの戦いが始まったので、屋までに冬物衣料と食料を持って学校に集合との事。さあ大変だ。持てる物だけでも何とかまとめ、夫が帰ってきてもすぐ送れるようにと、汗だくで片付ける。ご飯を炊かなくては、と思いながら外を見るともうぞろぞろと皆道を歩いて行く。「急がなくては」、と朝のご飯を握り、寒いときの用心に毛糸ものをいっぱい詰めて、一幸にも幸子にも持たせる。大切なものは一つにまとめ、着られるだけ(五・六枚)服を着込んで洋を背に二人の手を引いて、家の戸締りをしっかりして学校へ急いだ。

のどかで豊かな生活が、突然、一転しました。終戦になる前にソビエト軍が攻め込んで来たのです。攻めてくる前の晩、「どうもおかしい」というわきが立ちました。「逃げなければいけない」と話している前日、関東軍の人たちは「転勤になりました」と言ってみんな先に逃げてしまった。関東軍が使ってしまったので列車も自動車もないので、持っている荷物を馬車に乗せ、私たちも逃げ始めたのです。守ってくれるべき関東軍はいないのにソビエト軍は攻めてくる。仕方がないので父たちは民間人だけで手元の銃を集めて、山にこもったのです。母の言葉によれば「死に行くのだと思うより、まるで出張を送り出すような気分でサヨナラをした」と言っていました。

山にこもった父たちは、夜が明けたら周りをソビエトのタンクに取り囲まれていた。タンクと戦く方法など誰も知らない。一発も打たずに降伏したそうです。それでシベリアに連れて行かれてしまった。関東軍で逃げ遅れて捕まった人たちと一緒にされてしまったのです。国際法上は捕虜を労働には使ってはいけないのですが、関東軍司令部はそれを認めてしまった。数十万人です。シベリアは何もない。攻めてくるソビエト兵も多くは囚人兵でした。父などは土木技師でしたから、本来はシベリアで長期間働かせられる可能性が十分あった。しかし、みんな、それを黙っていてくれたので3年ぐらいで帰してもらえたそうです。

でも、その間が大変だった。隣で寝ている人が死ぬのがわかる。亡くなる前の晩にシラミが一斉にいなくなるのだそうです。体温が下がるのです。食べ物といっても黒パン一個ぐらいです。栄養失調になってポーッとしている。元気な人は弱っている人のパンを取ってしまう。取られた人は自分が食べたと思ってしまう。それぐらい意識がもうろうとしている。そして、そういう人は死んでいく。全体の3割ぐらいが亡くなられたと聞きました。零下40度か50度の土地ですからね。だから本当に便所のなかに落ちていたジャガイモの切れ端でも何でも食べたと言っていました。

モンゴル方面とシベリア方面の両方から攻められていた。開拓農民の方がたくさんいて、それは本当に悲劇でしたね。開拓農民の方は子どもが多い。「産めよ、増やせよ」で、子どもは労働力ですからね。

石の轍の馬車でゴトゴトと大草原を逃げました。秋ですから見渡す限り桔梗が咲いていました。そこに飛行機が来て銃撃をする。その間は草の中にもぐって隠れる。私は子どもで小さかったので、桔梗が人間の背の高さぐらいに感じられた。轍が桔梗の紫色に染まっていた。敵機が去るとまた馬車で移動する。ずっと後年まで桔梗の夢を見ましたね。そのあと無蓋貨車に乗って逃げました。そうすると敵は銃撃に来るんですね。私の前にいたお母さんが赤ちゃんを抱いておっぱいをあげていた。その人が銃撃でやられて血が私にバサッとかかった。すごかったですね。これもいつまでも夢に見ました。

「水が欲しい」と子ども達にせがまれても一滴の水も無い。まわらぬ口で洋がブーブーするので唾でも飲ませてやろうとするが、いくら努力しても口の中はカラカラで喉が引きつるだけ。隣の人の水筒にはまだ水が入っているだろうか？こんな時には「下さい」とも言えない、人の事より自分が大切なものだ。男の人がいてくれたらなあと思う。子どもが泣き、その体に巻き付けておいた着物も邪魔になり一枚一枚脱ぎ捨てた。腕に付けていた時計も取ってしまう。

何だか頭がぼーとしてきた。思ってもいない事が口から出る。それがおかしくて笑う。他人が見たらまるで気遣いだ。私の血筋には気遣いの人はいない、などと考えるくらいだから気がおかしくなっていないと思うのだが。なんだか頭のゼンマイが切れてしまったようだ。こんな事が二日も続いたら本当に気が狂ってしまうかもしれない。

「さあ、降りるんだ」という声にハツとして目を開いた。どうしたことか何も見えない。真っ暗だ。「奥さん！私の肩につかまちなさい」と誰かに声を掛けられて、ようやく汽車から降りた。まるで高い船の上から飛び降りたような感覚だった。皆夜の線路上にへなへたと崩れ落ちる。もう歩けない。何しろ水が欲しい。まわりをキョロキョロしていると、これが本当に天の助けというのだろう。雨が降ってきた。大きな口を空に向けて、思い切り雨水を飲む。ようやく元の私に戻れた思いがした。喉が潤うと、皆起き上がって駅に向かった。まだ目元が少し引きつっている。

要するに、玉音放送も何もない。もう敗けたのはわかっていた。父は自分たちを守るために山にこもったままいなくなってしまった。シベリアに連れて行かれたのですが、そんなことは残った家族にはわからない。死んだものか、あるいはシベリアか、そんなことはわからない。残された大人は女と年寄りばかりです。とにかく哈爾濱まで戻るのは大変だったのです。



やっと汽車に乗れたが、子ども達は網棚に乗せ、四人掛けの椅子に六人座り、間には二人が立ってどうにも身動きが取れない。汽車の中で隣の赤ちゃんが死んでいった。奥さんが大声で泣きわめく。同情しなければならぬと思いつつ、無性に腹が立った。悲しいのは彼女だけではない、と口まででかかったが、ぐっと押さえた。家の洋も明日か明後日の命。洋はハシカにかかっていた。私はその時が来てもあんな様はしたくない、と心に言い聞かせた。

吟爾濱に早く着かないかと待っていたが、夜がきて空が明るくなってもまだ到着しなかった。死んでしまった赤ちゃんをおぶっていた人も、川の上から赤ちゃんを捨てた。ドボン、ドボンといくつもの音がする。捨てる人の顔も死人と同じ色だ。

哈爾濱に戻りましたが、元の日本人街を満州人が襲って来る。彼らは貧乏ですからね。それで何から何まで持って行ってしまふ。身ぐるみはがれます。量から何からすべて持って行ってしまふのです。電気も来ていないのに電球まで持って行った。私は木でできたタンクのおもちゃを持っていたのですが、それを取られそうになってギャーギャー泣きました。そのせいか、そのおもちゃだけは取られずにすんだのを覚えています。

ソビエト兵がマンドリンの形をした拳銃を撃って中国人を追い払う。そのソビエト兵の腕を見ると、いくつもズラッと巻き上げた腕時計をしている。しかもその時計の時間がみんな違う。彼らは時計が読めないのです。母は女性だとわかると危ないので、頭を丸坊主にして顔に墨を塗っていました。満州人の服を着て男のような格好をしていました。

いよいよ八月十五日。天皇のラジオ放送を聞く。泣く人もいたが、私は泣けなかった。負けるという事はうすうす感じていた。負けたのだ。仕様が無い。泣く気力も無いのかもしれない。明日がどうなる事か、考えも付かない。

玉子でも茹でて食べようかと勝手口から外をのぞくと、幾十人もの満人がワイワイ言いながら品物を持ち出している。何が始まったのだろうかと思っている間に、こちらにもやって来る。ワーワーと叫びながら箆筒、戸棚、雨戸までありとあらゆる物が、大水に流されたように無くなった。恐ろしくて押入れに入り中から戸をしっかりと握っていた。青龍刀を持った者、鎌を振り上げる者、黒く脂ぎっていて、映画に出てくるそのままの顔をしてわめいている。今までの怨みを晴らそうと何から何まで片端から持って行ってしまふ。暴動とはこういうものなのだろう。何も無くなってしまった。

ついには私達も引っぱり出される。Mさんが裸にされ、女はシミーズ一枚にされる。一幸にも手が伸びた。外を見るとロシアの兵隊が銃を構えて立っていた。「助けて」と大声をあげてロシア兵の後ろに隠れた。訳の分からぬ大声に満人たちはビクビクして、蜘蛛の子を散らすように逃げていった。その隙に私達も逃げた。

中国の、特に北満の人は文盲が多かったのです。日本人はほとんどが字を読める。彼らは、明らかに日本人は自分たちとは資質が違うと思ったのでしょう。それで、日本人の子どもをくれて言うてくる。しかし、男は仇討などする恐れがある。女の子は頭がよく、労働力になり言うことを聞く。小学校1年ぐらいの子がずいぶん中国人にもらわれていきました。それが中国残留孤児になったわけです。よく子どもを捨ててきたというような言いかたをされますが、実は、そのままいけばみんな死ぬと思っていた。そこに中国人が来てまんじゅう20個で子どもをくれという。中国人にあげた子どもは確実に生き延びられる。そして、まんじゅう20個で残った子どもたちが飢えずにすむ。だから名札を着物に縫い付けたりして中国人に子どもをあげた。だからこそ、戦後、「実は私が親です」と言って手を挙げづらくなってしまったのです。本当に壮絶ですよ。

二～三百人の満人がやって来て私達を一箇所に集め、ぐるりと周りを取り囲み、持っている物を出せと脅迫する。娘をくれと、手を引っ張る。取られたら大変！向こうとこっちで互いに手を引っ張り合う。娘が大声で泣き叫ぶ。泣いたので助かった。まったく日本人もこうなると哀れなものだ。

一人去り、二人去りして、夕方になってようやく家に入れた。中支那北安は昔、共産匪が農民になった所なので何をかわからない。支部の会議室に女子どもを真ん中に、男の人達が周りを囲む。「ピストルが五丁有るので、いざという時は覚悟してください」と言われる。「私もお願いします」と頼んだ。

終戦二日後の8月17日、北安の学校に收容されました。ひとつの教室に60～70人が詰め込まれ、頭と足を互い違いにして寝る状態でした。夜中にトイレに行くと、もう入る場所がない。夜もロシアの兵隊が女を探しにきます。明るくなると今度は時計をあさりに来る。3000人の共同生活でした。学校の校庭では、満人が昨日、略奪したものを市に出して売っている。

八月の暑さに身動きが出来ない生活で毎日病人が出る。はしかがはやり始め、2～3歳の子どもが櫛の歯が欠けるようにバタバタと死んでいく。病院の先生はいても薬は無い。長い二ヶ月だった。

何しろ便所に行くにも男の人の監視がないと安心して行けない。長い穴の上にコモがまいてあるだけの便所に二十人もの人が前の人のお尻を見ながら用を足す。一部が済むと「ハイ」と監視の手が拳がり、後の人がサッと跳んでくる。連れて行かれては大変なので、兵隊が来る前に用を足さなくてはならない。女の人は顔をわざと黒い泥を塗り付けて、お互いに見られた様ではない。それでも、黒いクーリーの服を着、真っ黒い顔をしていてもやはり自分は女だと思っているらしい。

小便の臭いなどで息が切れそうな汽車に詰め込まれ、哈爾濱を通り、2年前まで住んでいた新京にたどり着きました。平和な毎日を過ごした新京は、どこも暴動にやられ荒れ果てていました。そこで弟が亡くなりました。

家がロシア人に乱入されたので抱いて逃げているうちに、気が付くと洋が冷たくなっていた。この子は手が掛からない子で、2時間でも遊んでいた。こんな事になるのなら、昨年哈爾濱まで行って痛い思いをするトラフオームの手術などしてやるのではなかった。かわいそうに思う一方、親孝行の為に死んでくれたのかとも思った。小さい子ども3人を連れていた私はさすがに疲れていたからだ。近所の坊さんと呼ばれ、児玉公園の生前仲のよかったMさんの子どものお墓の隣に埋めた。辺りは日本人の墓標でビッチリ、何千人埋めてあることか。

翌日、花を持ってお墓参りに行って驚いた。「犬と日本人、入るべからず！」と大書してあり、すっかりローラーで地ならししてあった。戦に負けた者の悔しさが胸に込み上げてくる。可愛そうな洋、きりも無く湧き出る涙をどうすることも出来なかった。



とにかく葫蘆島(コロトウ)の收容所までたどり着き、そこから博多まで逃げてきました。私は哈爾濱に戻ったところから本当に何も覚えていないのです。記憶がなぜか欠落している。次に記憶に残っているのが引揚船でした。上陸前に赤痢が発生して20日間、船に足止めを食わされました。いよいよ明日、上陸というので最後のお米を炊こうと置いておいた。そうしたらそれを盗まれてしまった。そんなこともありました。

上陸すると頭からDDTを浴びせかけられた。そして、自分の顔ぐらいあるお赤飯のおにぎりがもらえた。母は子どもが食べ残すのを期待していたのですが、みんな食べてしまった。

島原の父の実家に2～3カ月いて、その後、母の姉のいた千葉の大原、房総半島の先っぽですね、そこに転がり込んだのです。私もそこで小学校1年に入りました。大原は米も取れる。地味がそれほどよくないけれど野菜もできる。そして、魚は豊富です。ですから、ひもじい思いはなかったですね。その子どもたちはみんな太っているのに、こっちはガリガリ。よくいじめられましたよ。母は私たちをそこに預けて豊橋に就職していました。縫い物の仕事でした。その後、父がムーンフェースの真ん丸な顔になって帰ってきました。それであまり父には向いているとは思えない食料品屋を大宮で始めました。頑固な商売をしていましたね(笑)。貧乏でしたが食べ物には苦勞しませんでした。

まあ、極限状態を体験したことで「どうせ一回は死んでるわ」という気持ちはありますね。それとね、ドリス・デイが歌っていた「ケ・セラ・セラ」の気持ちですね。あ、それから、1929年のミュージカル、「回転木馬」のなかに「You never walk alone(君は決して一人で歩かない)」という歌があります。エルビス・プレスリーも歌っています。

嵐の中を歩くときもあなたは一人ではない  
嵐の向こうには輝く大空がありひばりの歌声が聞こえる  
だから顎を引き締めて真正面から向かって行け

というような歌です。酔っぱらうとよく歌いながら家に帰ります。この歌の歌詞も好きですね。

若い人へのメッセージ？ そう、今の人はあきらめるのが早いですね。人間、極限状態になると「できない」と思っていたことが「できる」方にスイッチが入ります。卑近な例でいえば、いくら練習してもできなかった鉄棒の逆上がり必死に練習しているとできるようになり、あとはずっとできるようになる。もうだめだと思ったところでようやく能力のスイッチが入る。ですから、あきらめるのが早いといつまでたっても本来の力が出てこない。

ちょっと優秀な子には、「お前ら、そんなにエリートじゃないよ」と言いたいですね。世界のエリートはもっとすごい。格差社会というのは自分たちが作っているのです。偏差値が低いとそれだけで自分をダメだと思ってしまう。あきらめてしまう。逆に偏差値が高いからといって、そのことだけで優秀だともいえない。勝手に自分たちがそう思って、自分たちで格差を作っている。その格差によって自分の成果が裏切られると思うとガクッとくるんですね。格差を作るのに加担するなと言いたいですね。

## 後記にかえて対談: 島田知保さんx岡本和久

岡本 | 8月は終戦記念日です。戦中・戦後を生きぬいた方々も数が減っています。極限的な状況を体験した方々の体験は、ある意味われわれの持っている貴重な資産です。その体験が風化しないように、消えてなくならないように文章の形にしておくことも意義があると思い、2回に分けて特集を組むことにしました。もちろん、とてもありがたいことなのですが、われわれはあまりに長く平和で安楽な生活が続いてきたために、それを普通だと思ってしまうようになってしまった。そして、「苦しい」とか、「大変だ」という基準がすごく低くなってしまい、ちょっとしたことでも「もうダメだ」と思うようになってしまった。そんな気がするんですが。

### 「国」と「国防」を考える

島田 | 確かにそんな気はしますね。

岡本 | 私は1946年、終戦の翌年に生まれました。先月号で紹介した父の手記にもあったように、私の生家の台所の床には大きく焼け焦げた跡があったのを覚えています。また、家に砲弾や鉄兜があり、近所の東京工業大学には防空壕がたくさん残っていました。庭に掘った防空壕は小さな池になっていました。もちろん貧しかったし、粗末な服で学校に通い、決しておいしいとはいえない脱脂粉乳とコッペパンの給食で育ちました。しかし、まあ、そこを原点としてみればずっと平和が続いて経済が発展し、成熟し、それなりに豊かな国ができました。

しかし、一方で国防面での安全などは極めて意識が薄くなってしまっている。みんな、生活の安全・安心にはとても敏感なのにね。国防はアメリカ任せのようになってしまった。一方のアメリカは戦後もずっとどこかで紛争に巻き込まれている。60年代の中ごろ、私がアメリカの大学に行ったころは本当にベトナム戦争が激化しつつあるときでした。しかも、国民皆兵制です。ルームメイトが18歳の誕生日に徴兵局に登録に行ったのをよく覚えています。成績の悪い順にベトナムに飛ばされるといううわさがまことしやかに流れていました。徴兵制はなくなっても、アメリカはずっと戦争と隣り合わせの暮らしをしていたんです。しかし、日本にはこれが完全に抜け落ちている気がします。決して、戦争がよいと言っているわけではないですが、緊張感というか、危機感は絶対に必要です。

島田 | 国防に対する考え方はいろいろあると思います。でも、われわれの生活は決して戦争とかかわりがないのではなかった。ずっと米軍基地はあったわけですね。私の大学は外国人も多かったし、そのなかには基地の人たちもたくさんいました。でも、正直言うとやはり彼らが持ち込む習慣というか、行動は受け入れられないものも多かった。ドラッグとか、人身売買とかですね。韓国は徴兵制がありますが、やはり、家族や友達と隔離されて人間性を捨てる訓練を受けるというのは人道的にもよくないと思います。



- 岡本 | 確かに戦争することは決してよいことではありません。でも、われわれ、自立が大切といっている最後の最後にはやはり国の保護の下に入っている。日本国のパスポートがあるから世界中、ほとんどの国に自由に行けるのです。もし、パスポートがなく海外に放り出されれば、その人がどうなっても誰も守ってくれない。その一番基本的な生存を確保する部分で、国というのはまだ現在の世界では重要なのです。ですから、国というものが消滅するという事の恐ろしさをわれわれは忘れていると思うんです。玉音放送のあと、「もう、日本はなくなったのよ」とお母さんが子どもたちに告げる上田卓さんのお話がありましたが、これは本当に胸にグサッと突き刺さる言葉でしたね。
- 島田 | 国の存在はものすごく大きな保障ですよ。今は、国が守ってくれていることが当たり前のようになっている。もともと国境は人間が引いた境界で、時代によって変化するもの。どんな国もいつかは消えてなくなる。戦争で国を守るにしろ、非暴力で国を守るにしろ、相当の覚悟が必要です。スポーツのときとか、不満のはけ口としては、国が意識にのぼってくるけれど、国を守るために自分がどうするかということはほとんどの人は考えていない。
- 岡本 | 国が守ってくれるのが当然と思うのと同じように、平和も当然という前提でわれわれの生活が成り立っています。本当は平和ではなくても、平和を直視しない状態といったほうがいいかもしれませんけれどね。
- 島田 | 自分たちで自分たちの国を守るという、意志のある国とない国では社会の組み立てからがかなり違ってくるように思います。国を守るという意志を浸透させる際に、ボトムアップか、トップダウンかという違いがあると思いますが、私は今の日本では、やはり国民一人ずつの意識を高めるボトムアップ方式の方がいいのではないかと考えています。個人がしっかりしてくることで国という器もしっかりしてくるのかなと思うんです。
- 今回、記事を読んでいて、実は現在の状態は戦後と似た部分があるのではないかなと感じました。東日本大震災後の日本と戦後の日本。戦後の日本には焼け野原から立ち上がろうという、ある意味希望があった。でも今は、みんなちょっと疑心暗鬼になっている。国も方向性を示せないでいる。そのようななかでみんながつながってきているという面もあると思うんですよね。

## 「戦後」と「3.11後」の違い

- 岡本 | 3.11と戦後の違いで一番大きいのは、戦後のときは今後の方向性を示してくれる、というか押し付けてくれる存在があったということでしょう。アメリカというね。「これからはこういう風にやらなければいけないだよ」と針路を教えてください。功罪ともにあるとは思いますが道筋をつけられた。3.11ではそれが無い。
- 島田 | ビジョンが見えない。本当はわれわれ個人がビジョンを示さなければいけないんですけどね。誰かがグランド・デザインを描いてくれるのを、口を開けて待っている。
- 岡本 | なぜ、そうなっているかというやはり戦後のグランド・デザインも人に描いてもらったものだからでしょう。与えられることに国民が慣れてしまっている。
- 島田 | かなりいろいろとキーワードは出てきています。持続可能な社会とか、地球規模での共存とか。それらのキーワードが経済や国家、あるいはわれわれの腑抜けた楽観主義のなかでうまくかみ合っていないことがあります。
- 岡本 | 「そんなのきれいごとだよ」とか「現実の社会ではそんなのうまくいかない」という既成観念で打ち消されてしまう。国家レベルでも、企業レベルでも、個人レベルでもキーワードが単なる概念で終わってしまっている。エクセキューションがないんですよ。政府が悪いのかといえばそれまでですが、でも、その政府を選んでいるのは国民ですからね。
- 島田 | 何かあるとみんな政局になってしまう。虚しいですよ。
- 岡本 | 希望が持てるのは、東北の悲惨な状態のなかから戦後を生きぬいたような力を持った強い人たちが出てくることだろうと思います。将来の日本のリーダーとなる人が、今回被災された若い方からたくさん出てくるでしょう。それを期待したいですね。

島田 | 戦中・戦後の厳しい状態のなか、歯を食いしばって生きてきた人たちがいて、その結果私たちが今こういう暮らしができています。安心な暮らしを謳歌するばかりでこのときに何もしなければ、前の世代の遺産を食いつぶすだけです。少し長い歴史感を持って自分たちの今を見てみると、これからの生き方や経済の見方なども変わってくるかもしれない。若い人にはぜひ、それをやって欲しいですね。

岡本 | 難しいのは、苦難が強い人間を生み出すとしても、今のこの豊かな日本が現実にあるわけで、急に「貧乏になれ」と言われても無理な話です。それではどうしたらいいのか、それが今回いろいろな方を取材して常に頭から離れなかった疑問でした。それで思うのですが、今、円高が進んでいるのは、ある意味日本の産業のグローバル化の遅れが引き起こしている面があります。もっと多くの企業が海外生産を増やし、生産拠点を新興国や発展途上国に移せば円高は止まるでしょう。でも、当然の結果として国内に雇用機会が減り、仕事を求めて遅れた国に出ていく人も増えます。その人たちは戦後の日本ほどではないでしょうが、やはり、貧しい生活がどんなものか、そのなかでどうしたら生き延びていけるのかということを学んでいくでしょう。これもひとつ経済の神様が与えてくれている試練なのかな、などとも思います。

## 「過保護」が「生き延びる力」を奪う

島田 | 80年代、90年代にはまだ若い人たちがそういうところに行こうとしていたんですね。その非日常的な生活がひとつのエンターテインメントだったということはあっても、彼らが今、NGOやNPOで活躍しているという事実もあります。わざわざ外国なんか行きたくないということを知ると、ちょっと大丈夫かなと心配になりますよね。

岡本 | 私は70年代の初めにブラジルのサンパウロで勤務したことがあります。当時のブラジルは今と違ってまさに発展途上国でした。バスに乗ればノミ・シラミがつく。町にはスリ・かっぱらいがいつも狙っている。私が駐在した2年間、わが家には電話がありませんでした。ブラジルの高層ビル35階にオフィスがありましたが、そのビルが火事になったことがあります。屋上に避難して消火を待ったのですが、あとで考えると危なかった。ちょうど、「タワーリング・インフェルノ」という映画が上映されているところでした。まあ、かなりの低開発国での生活でしたが、ブラジルで生活した経験は本当に人生で役にたっています。

島田 | 私も80年代、バックパックで世界のさまざまな場所に行ったのは貴重な経験でした。モノがなくても人間は生活ができるとか、日本が安全の代償で何を失っているとか、いろいろな発見がありました。安全ではないところでも人間は生きているんですよ。

岡本 | そう、安全じゃないから生き延びる力が出てくる。

島田 | 日本はあまりに過保護ですよ。電車降りるときに忘れ物の心配までしてくれる(笑)。

岡本 | ホームでは電車が来るので黄色い線の内側に下がれとか……(笑)。

島田 | アメリカのグランドキャニオンでは、一目見て落ちれば死ぬとわかるところには柵がない。そういう意味では二重、三重に安全網をめぐるしてくれることで自分の頭を使わない、自分の危機に対する感覚を使わないということになっている。

岡本 | 動物的な生命力というか、サバイバル力がひ弱になっていますよね。

島田 | もう一つは教育の問題です。学芸会で主人公のお姫様が5人も6人もいるというおかしな現象がありますね。徒競走で全員が一着とか。本当は社会のなかで自分の能力を相対化して考えることを止めてしまっているのです。みんな気位は高いけれど謙虚さが無い。

岡本 | 規格大量生産は工業製品だけでなく、子どももそうです。ですから、ちょっと人と違うと、欠陥品としていじめの対象になる。昔、足の遅い子は「くやしかったら勉強でこい」などうそぶいていた。そんなしぶとさが欲しい。

- 島田 | ファッション雑誌で同じものを売りつけようとしているのに、キャッチフレーズが「わたし流」だったり「自分流」だったりする。これ自己矛盾ですよ。ある意味、消費文化に絡め捕られた箱庭のような文化になっている。だから、30~40代になって突然、仕事を辞めて「自分探しの旅」に出たりする。「自分」は仕事をするなかで探していくものです。
- 岡本 | 本当にそうです。どこかの場所に「自分」が落ちているのではない。自分のなかにしか自分はいないんだから。角界に「欲しいものは全部、土俵に埋まっている」という言葉があるそうですが、欲しいもの、自分も全部、仕事という土俵に埋まっている。必死にそれを掘り出せばいいんです。
- 島田 | もうひとつ顕著なのが資格収集ですね。いろんな資格を取って安心したり、成功した人の書いた本を読んでそれを真似ようとしてたり……。
- 岡本 | 3時間でわかるナントカみたいな(笑)。
- 島田 | そんなことで成功できるならみんな成功していますよ。解答がないのが人生です。でも、何かを習おう、教えてもらおうとする。
- 岡本 | 学ぶのはよいことだけど、近道、早道、楽な道を教えてもらいたがる。長期投資でのんびりやっていたらいいのに、みんなすぐに儲かる短期投資の方法を知りたがる。何かうまい方法があるはずだと思っている。
- 島田 | あるいは貯金しているから大丈夫という人や、将来の生活を考えるのが不安だから考えないという人もいる。でも、比較的豊かだとか、日本が安全だとかいう状態はあまり長くは続かないかもしれない。もっと切迫感を持ったほうがいいと思いますね。

## 「安全」の意味とは

- 岡本 | だからね、震災や原発の例でもわかりますが、何が起こるかわからない。もしかしたら隣の国が突然日本を攻めてくるかもしれない。たぶん、起こらないだろうけれど、絶対にないとはいえない事象に対して、もちろん国としての対策は必要ですが、同時に個人のレベルでも「万一」の場合にどうするかということは少しだけでも考えておく必要がある。それを国が何とかしてくれるだろうと丸投げするのは間違いですよ。「座して死を待つのは嫌だ」と思うなら「いざ」というときの備えを自分で考えておくことです。それが選挙での投票行動で表現されたり、自分年金づくりになったり、あるいは海外に口座を持って資産の安全を図るというようなことになるのではないのでしょうか。
- 島田 | アジアの人って金(きん)を身に着けているじゃないですか。何かのときに着の身着のままでも金だけは残る。そういう緊張感が日本にはあまりないですね。
- 岡本 | オスプレーの配備が問題になっています。私はオスプレーが最適な機種かどうか、それが本当に戦略的に必要なかはわかりませんが、少なくともアメリカは「安全」のために配備を考えている。日本の反対派は「安全」の面でNOと言っている。同じ「安全」でも全然意味が違う。
- 島田 | そうですよ。もし、NOならそれに対してどのような対案があるかという点が抜けている。東日本大震災のような悲劇も、日本では結構風化が早い。原爆を広島と長崎に落とされたのに、すぐに「アメリカ大好き」になってしまう。最近の若い子は原爆を落とされたといっても「間違っって落としてしまった」ぐらいにしか理解していない。だいたい、日本とアメリカが戦争していたことだって知らない。
- 岡本 | つい、60数年前のことが遠い歴史上の事件になってしまっている。保元の乱や応仁の乱とはいわないけれど、少なくとも、日清・日露・第一次対戦と並列になってしまっている。それとともにその極限状態における体験も失われつつある。極限状態で得た生き延びる力も伝わらなくなっている。それは日本としては本当にもったいない。それゆえ、この企画には意義があると思ったのです。
- 島田 | のんびりとしていても、いつ、戦争が起こるかなんてわからない。特に今のような経済環境ですとね。私は、よく「今の日本はワイマールだ」と言っているんです。他力本願のまましていると、忘れたころに災難がやって来る。声の大きい先導者が出てきてみんながあおられる。方向を示してくれてみんながその方向に向かって走り出す。



岡本

今回の聞き取り取材で感じたことをまとめておきましょう。一つは戦中・戦後の極限状態は決して過去のものではなく、これからだっていつ起こっても不思議ではないということです。東日本大震災はそれを思い出させてくれました。この点はとにかく忘れないでほしい。そして、そのようなときにでも耐えられるように平和ななかでも「生き延びる力」を養っておいて欲しい。極限状態を体験するのは難しくても、たとえば必死に仕事をする、発展途上国で何年か仕事をしてみるというのもいいと思います。また、真摯に東北の復興活動に参加してみる。少なくとも極限状態の疑似体験をしてみるとことは意義があると思います。

そして、最後に「いざ」というときに生き延びられるように心構えを持つこと。もちろん、個人として、自分を守るための手段を講じることは当然です。しかし、それには限界がある。やはり、国というものの存在は大きいのです。ですから、個人、生活者として少しでも国や企業がよくなるような働きかけを続けていくことが非常に重要なのではないかと感じます。多くの方が戦中・戦後の体験をあまりお話になりたがりません。今回、取材に応じていただいた上田さんご兄妹、田中さん、鳥山さん、宮崎さんに深く感謝したいと思います。